

タイトル:平成 24(2012)年度 教育セミナー

日時:平成 24 年 9 月 14 日(金)～17 日(月・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「前近代西アジアにおける多民族統合:クルド系諸部族の場合」

山口 昭彦(聖心女子大学)

「前近代西アジアにおける多民族統合:クルド系諸部族の場合」と題して、今私が最も関心をもっているテーマについて、まずは、どういう経緯でこうした問題を考えるにいたったのかといったところから話をさせていただいた。とはいえ、過去の記憶は曖昧になり、ともすれば一つの筋の通った物語として話してしまうがために、学部生時代から私が経験した紆余曲折、右往左往、逡巡、挫折などはほとんど伝えられなかった。そういう意味では、いまさらではあるが、割り引いて聞いてもらった方がよかったかもしれない。

報告の主旨は、以下の通りである。従来、前近代の西アジアではイスラームが統治理念として機能しているが故に、ムスリムである限り民族的な差異はさしたる意味をもたず、多様な民族が共存していたという観念が根強く、それもあって、実際にどのように共存が行われていたのかについての関心が薄く、研究も進んでいない。そのため、近代になってナショナリズムが入ってきて、突然、民族意識に目覚めるという物語が描かれることになる。しかし、史料を丹念に読むならば、前近代社会においても、エスニックな違いがときに偏見や対立を生んでいたことがうかがえる。こうしたことを踏まえ、前近代の西アジアにおいて多民族統合がどのように行われていたのかをあらためて問い直すことが求められているのではないか、そのことが、近代以降のナショナリズムのあり方を考えるうえでも重要なのではないか。以上のような問題関心から、サファヴィー朝の 200 年の支配によってクルド系諸部族がイランという政治空間にどのように統合されていったのか、他方、クルド系諸部族が王朝の支配体制のなかでどのように権力の分け前を得ようとしたのかといった点について、概略を説明させていただいた。

普段、あまり若手研究者と接触する機会のないものとして、たいへん刺激的な時間であった。勤務先の大学には中東地域を専門とする大学院生がおらず、専門的な話をする相手もない。そういうなかで、若い院生諸君に話を聞いてもらい質問をしてもらったことは、自分のアイデアのどこがわかりにくいのか、修正すべきなのかを考える手がかりを与えてくれるものであった。他方、私自身の都合により 1 日目と 2 日目しか参加できず、受講生のうち二人の報告を聞くにとどまったのは、まことに残念であった。

最後になったが、本教育セミナーでの講義の機会を与えてくださったアジア・アフリカ言語文化研究所のスタッフの方々にお礼を申し上げたい。